

「人材育成県」へ針路を

被災地での海外研修・進学支援 教育支援グローバル基金(東京都)による「ビヨンドトゥモロー」では被災

学生の大学での学費や生活費を支給するプログラムや米国で復興まちづくりを学ぶ短期研修などを提供。大学の奨学金プログラムには2012年度、被災3県から20人が選ばれた。1期生96人が大学などに進学した「みちのく未来基金」(仙台市)や本県の「いわての学び希望基金」などは震災遺児を返済不要の奨学金で支援。日米官民パートナーシップ「トモダチ構想」で米国に短期留学するプログラムなどもある。

係分野など進路選択に迷ったり、震災を伝える機会を得たらしい。

大槌高でこう話してくれた。これまで海外研修はなかったという同校。佐藤一也副校長は「外に目が向く機会があった2年の東梅佳菜さん。まりなかつた生徒たちにとって大きな財産。学んだことを中国で現地の高校生と交流して2年の小林桂祐君は「大生かそうと正面からしっかり学んで進んで、語学も勉強した受け止めている」と成長を見守る。

1年の菅谷奈菜さんも「地元で国際的な仕事ができばいいな。ILCがそういう場になるならうれしい」と夢を膨らませる。

震災後、同校では民間団体などの無償支援で3月までに延べ60人超が中国や米国、オーストラリアなどへ渡航する。語学や地域貢献を学んだ。

ラムに出合ったことで、意欲的な大学生を送っている。

「震災でつらい経験をしたけど今は夢を実現するチャンスがつかれそう」

復興支援のおかげで海外や大学で視野を広げ、将来は地



震災後に支援を得て、海外で視野を広げるチャンスをつかんだ(左から)小林桂祐君、東梅佳菜さん、菅谷奈菜さん。大槌高

元のために働きたいという子どもたち。本県がILCの国際研究地域づくりを目指す上でも、彼らのような人材を今後も育成していけるかが大きな課題だ。

実際、ILCでは研究所などで科学者や技術者、事務、医療や商業関係者として県民が働く機会が生まれる。国際的な環境で専門を生かせる人材を育てていかなければ、新たな雇用の場も活用できないだろう。

そのためにも岩手は世界に発信できる「人材育成県」を目指してはどうか。例えば県内の中高生は希望すれば海外で研修できたり、進学意欲の強い生徒が大学などに無償で行ける仕組みを県が独自につくってもいい。財源は「いわての森林づくり県民税」のような目的税で確保することも一つの手法だ。

「地元では大学進学はまだまだ特別。やりたいことのある人が学びやすい環境にしてほしい」と福田さん。ILCの実現には従来の枠にとらわれず次世代を育てていく、本県の覚悟が問われる。

第4部 地元の人づくり ①

超大型加速器・国際リニアコライダー(ILC)の誘致を目指す本県にとって一番大事なことは、国際研究地域を支える地元の人づくりだ。研究所や周辺施設で世界中の人たちと働き、地域でも多文化の中で一緒に暮らしている県民をこれからどう育てていくのか。ILCを見据えた本県独自の教育の在り方や住民の意識醸成の方策などを考える。(第4部は5回続き)

「ここでは思い付かないほど大きな夢を持っている人たちにも出会い、視野が広がった。今は環境や行政、国際関